

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 12 日現在

機関番号：84202

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21520838

研究課題名(和文)内水面定置漁業の考古・民俗学的研究

研究課題名(英文) Archaeology and folklore research of inner water surface stationary fishing

研究代表者

植田 文雄 (UEDA, Fumio)

滋賀県立琵琶湖博物館・特別研究員

研究者番号：60526317

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円、(間接経費) 1,020,000円

研究成果の概要(和文)：内水面定置漁業の考古・民俗学的な研究である。具体的にはエリ・ヤナなどの漁具使用の現況を調査した。現在、淡水漁業の盛んな琵琶湖周辺の状態を調べ、周辺地域、日本国内へと範囲を広げた。さらに、中国の長江流域を中心に同様の現地踏査を行った。

併行して、日本列島の考古学資料を集成し、それらの歴史背景を調査した。その結果、ヤナ漁は新石器時代(縄文時代)に各地で多種多彩に発明された漁法であり、エリ漁は中国長江流域で発明され、日本列島には稲作導入以後、伝えられた漁法であると判断された。

研究成果の概要(英文)：This is archaeological and folkloristic research into stationary, surface fishing techniques in inner water areas, specifically, investigation into the present situation of the use of the fishing apparatuses 'eri' and 'yana'. Recent investigations of the state of the freshwater fisheries around the prosperous Lake Biwa were subsequently extended into surrounding areas and the rest of Japan. Furthermore, an identical survey was performed centering on the Changchiang Valley in China. Concurrently, archaeological data from the Japanese archipelago were collected and historical backgrounds were investigated. Results show that the 'yana' fishery technique was invented in various areas during the Neolithic era (Jomon period), while the 'eri' fishery was invented in the Changchiang Valley, China. It is concluded that the 'eri' fishing technique was introduced into Japan after the establishment of rice agriculture.

研究分野：考古学・民俗学

科研費の分科・細目：基盤研究(C)

キーワード：文化人類学 物質文化 内水面漁業 考古学 民俗学

1. 研究開始当初の背景

日本列島は四周を海に囲まれ、多数の河川をもつ地勢である。魚介類の捕獲と食糧化は、列島人類の生命維持と種の保存、さらに社会・文化の進展のために重要である。漁労技術の展開は、列島の独自性を提示する基層文化のひとつである。列島随一の内水面(湖沼・河川)を保有する琵琶湖域では独特な漁法が発達し、エリやヤナなど定置漁業を開発してきた。近代以後、外洋漁業が活発化するまでは、むしろ内水面における定置漁業が一定の漁獲を上げてきた。歴史的にみても、古代・中世における琵琶湖周辺の御厨や網代の設置は重要であった。

しかしエリ・ヤナなどの史的背景は、ほとんど明らかになっていない。その一因は、竹木などの植物を構造材とするため物質資料として残存せず、遺構としての検出が難しいことによる。同様に、文献資料研究も系統だっていない。いっぽう、内水面定置漁業は現在もおこなわれており、人類学的な手法でその構造や機能を検証することは可能であった。この研究は、かつて民俗学の立場でおこなわれてきた。日本の民俗学を牽引した澁澤敬三は、昭和初期に近代以前の漁業技術史を十数年にわたり調査した。そこでは、内水面漁業に多くの研究視線が向けられ、近代以前の漁業において内水面域の比重が高かったことを確認できる。

琵琶湖域では伊賀敏郎の研究が基礎となる。彼の研究では内水面定置漁業の歴史的背景や、大正から昭和初期に設置された定置漁具の構造分類が図面で解説された。その研究は技術的側面が多いものの、基礎資料として重要であり再評価すべきものである。

その後、1972～1996年にわたる琵琶湖総合開発により、琵琶湖域の総合的な人類誌調査がおこなわれた。その内容は、民俗学的な手法を駆使して調査されたもので、具体的に解説され、伊賀と並び本研究の基礎となるもの

である。

2. 研究の目的

代表者は、1986年に滋賀県能登川町(現東近江市)斗西(とのにし)遺跡で、古墳時代のヤナ遺構を発掘調査し、報告した。その後、各地で類例が検出されたが遺構の概念規定が曖昧で検証が不十分であった。

そこで、エリ・ヤナさらにウケや定置網漁などを、考古学および民俗学の方法で追究し、内水面定置漁業の歴史的展開について明らかにすることを目的とする。また比較検討の意味からも、列島およびユーラシア域の類例を検証し、琵琶湖域で発達したエリやヤナの特徴を明らかにする。

3. 研究の方法

研究目的を達成するために、調査項目を考古資料・文献資料・民俗資料・人類学資料・関連資料の5項目に分けた。

- (1)考古資料 列島における考古資料に、内水面定置漁具とこれに類する遺構・遺物を収集し、それらの時間分布・空間分布を精査し、史的展開の見通しをたてる。
- (2)文献資料 琵琶湖域の近世・近代史料を収集し、琵琶湖域の近世・近代史料(古文書・図・古写真)に、内水面定置漁業関連資料を収集し、これに関する史料の基礎データを整える。
- (3)民俗資料 琵琶湖博物館所蔵の漁具のうち、内水面定置漁業に関連する小河川に設置するウケや湖畔での定置網の調査・分析をおこなう。
- (4)人類学資料 琵琶湖に現存するエリとヤナの分布調査を実施し、立地・形態・規模等を記録する。形態と規模を計測するために、航空写真から図を作成した。併行して過去に撮影された琵琶湖および周辺の航空写真を観察し、図化する。
- (5)関連調査 日本列島および、東アジア地域の内水面定置漁業の実態を調査し、モンズ

ーン地帯にさかんな淡水魚食文化の体系化に結びつける。

4. 研究成果

(1) エリについて

琵琶湖 現在おこなわれるエリは、湖岸近くの水深約3～15m程度の浅瀬に、合成樹脂製のポール(1本あたり5～15m)を1～2m間隔で数十から数百本を打ち込み、杭列に網をつけていくものである。全長は小さいもので30m、大きいものだと700mを超える。先は弓矢(幅20～200m)のように広がっていて、網に沿って回遊してきた魚が入っていく、やがて魚は狭まった奥に迷い込み、最後の約3～5m四方の網(ツボ)に入って出られなくなる。植田の調査では、琵琶湖全体で大小合わせ170基のエリを確認した。小さなものは漁港にある30mほどのエリで、ブラック・バスなど外来魚駆除用であった。最大は琵琶湖大橋南側の約700mのエリで、琵琶湖全域では全長500m程度のものが多いようである。

中国 中国湖南省には、洞庭湖という中国で2番目に大きい(琵琶湖の4倍)湖がある。揚子江の中流にあって、平均的な水深は約7mと浅く広い。ここで実見したのは、広大な草地に無数の竹杭が刺され、網がつけられた状態で放置された数十のエリであった。当時は洞庭湖の水位が下がっていたのである。全長は50～80m程度、竹杭は5m程で、これらのエリが操業していたのは3～4m深い時だったようだ。湖中には、当時操業中のエリが波しぶきに洗われるのが見えた。つまり、湯水や満水など水深に合わせてエリをつくり分けていたことがわかった。また湖北省では、省都武漢郊外の農村(応城市桃家鎮)で小さなエリを見つけた。それは50×50m程度の沼地につくられていて、長さが25m、魚を捕獲する矢の部分が25m程度のものであった。ややいびつな形だが、両端にツボがつくられて

いて構造は琵琶湖の小型エリと同じであった。地元では「迷魂陣」と漢字で表し、「メイ・コン・チン」と発音するようだ。農民に聞いたところ、スッポンや雑魚を捕るということであった。そのほか、下流の江蘇省蘇州付近でも、随所にエリ形定置漁具を確認した。

東南アジア カンボジア中部のメコン川中流にある、トンレサップ湖で確認できた。トンレサップ湖は平均水深2mほどしかなく、雨季には乾季の3倍の面積にもなるという。乾季でさえ琵琶湖の4倍、雨季には10倍以上にもなるので、この湖がもたらす恵みは相当なものである。そしてやはり、ここでもエリ形の杭列に遭遇した。それは長さ30mほどで、木の杭に竹の簾を立て並べたものであった。アジアで見かけたエリは、どれも木や竹でつくられた簡単なものである。

(2) エリの歴史

考古資料に確定的なエリ関係資料はない。平安時代中ごろ、百人一首に登場する曾根好忠に「ささ木津に 簀がきさほせり 春ごとに 糸りさす民の しわざならしも」という歌がある。「ささ木津」は、現在の滋賀県近江八幡市にある西の湖か旧大中の湖を示し、春の好日に漁民がエリの簀を干す情景が詠まれている。

中世には、同県近江八幡市の「奥津嶋神社文書」にエリの設置にまつわる争論がある。

近世には同県東近江市福堂町自治区所有の古地図に、内湖に設置された小型エリの略図が確認できる。

現在ある琵琶湖のエリは、大きいもので数百mもある。しかし、このようにエリが巨大になったのは明治に入ってからで、古代～近世までは内湖に建てられた小さなエリであった。アジア各地で見かけた簡単なエリが本来の姿だと仮定できる

エリは淡水魚を捕るために、魚の回遊する習性を利用した漁法である。それはアジアのモンスーン地帯から日本列島の温帯域にかけ

てひろがり、琵琶湖には 1000 年以上以前に、稲作の諸文化とともに大陸から伝えられたとみてよい。フナズシなどの発酵食品が、アジアで広く好まれるのも同じ文脈で理解できた。

(3)ヤナについて

考古・歴史・民俗資料をまとめると、次のような発展段階が認識できた。

第 1 段階：ヤナの起源は文献では中国の古典にあり、年代では新石器時代の初期には、内水面の複雑なアジアのモンスーン地帯でおこなわれてきたと考えられる。それは、河川の流れを石列で堰き止め、遡上する小魚を 1 か所に誘導し、捕獲する方法である。仕掛けの構造は多様であり、多地域で現在もおこなわれている漁法で、これを「石止めヤナ」とよぶ。河川の中に石を並べるだけであり、遺構として検出される見込みは少ないものの、滋賀県石山貝塚でコイやフナの淡水魚骨が多数確認されており、縄文時代早・前期におこなわれた可能性は高い。

第 2 段階：新石器時代の後半に、植物繊維の加工やもじり編み技術の発達、そして磨製石斧の普及によって、木杭の伐採と加工技術が進展した段階である。河川を横断して 2 列以上の杭列で堰き止めその空間を捕魚区間とし、ここに溜まった魚をタモ網やモリで捕獲する仕掛けで、「杭止めヤナ」とよぶ。河川の状況や魚種によって形態は多様で、北海道紅葉山 49 遺跡・愛知県朝日遺跡・滋賀県斗西遺跡など直線的構造の類と、岩手県葦内遺跡、滋賀県古高・経田遺跡など、八字形の杭列に誘導して陥穽部に集める類がある。両者は、縄文時代後期には使用されたとみてよい。民俗例では、アイヌのテシが該当する。

第 3 段階：巧みな杭列と柵で誘導し、陥穽装置に魚を落とし込むものである。これはウケを設置することが不可欠で、仕掛けて一定時間後に引き上げるという最も容易な方法である。この方法を「ウケ設置ヤナ」とよぶ。ウケの設置された遺構は見つかっていないが、

遺物としてのウケは縄文時代後期の東京都下宅部遺跡で、また晩期の新潟県青田遺跡では、ほぼ完全なものが 2 点検出されていることから、縄文時代後・晩期には使用されたとみてよい。

以上の観点から総括すると、これまで考古学で漁労遺構と報告されたものはすべてヤナで、多くは上りヤナである。そしてこれは現在も列島各地で見られ、内水面定置漁業の骨格は縄文時代後・晩期には確立したといえる。注視すべきは上記の基本形をもちつつも、河川の状況や魚種によって形や構造が柔軟に変化してきたことである。この種の漁労施設はじつに多様で、地勢や対象魚種を考慮し、実際に捕獲可能かを検討することも必要だ。

今後は、他地方の民俗例も照らして内水面漁業の背景を追究したい。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

植田 文雄、「縄文時代ヤナ遺構の再検討」、『淡海文化財論叢』第四輯、査読無、2012、23 - 28、淡海文化財論叢刊行会編

植田 文雄、「湖の恵み - 琵琶湖の漁業史」、『佐加太』第 37 号、査読無、2013、2 - 3、

植田 文雄、「湖の恵み - 琵琶湖の漁業史」、『佐加太』第 38 号、査読無、2013、2 - 3、

〔学会発表〕(計 3 件)

植田 文雄、「エリとヤナの漁業史」、新琵琶湖学セミナー、2012 年 2 月 4 日、滋賀県立琵琶湖博物館(滋賀県草津市)

植田 文雄、「エリとヤナの漁業史」、米原市歴史講座、2012 年 12 月 4 日、米原市伊吹山文化資料館(滋賀県米原市)

植田 文雄「石狩川におけるアイヌのヤナとエリをめぐって - 琵琶湖との比較の中の定義」、琵琶湖博物館特別研究セミナー、2010 年 12 月 11 日、滋賀県立琵琶湖博物館(滋賀県草津市)

〔図書〕(計 2件)

植田 文雄 他、大竹憲治先生還暦記念論文
集刊行会、『梅檀林の考古学』、2011、633 - 644

植田 文雄 他、サンライズ出版、『琵琶湖
と地域文化』、2011、415 - 420

6. 研究組織

(1)研究代表者

植田 文雄 (UEDA, Fumio)

滋賀県立琵琶湖博物館・特別研究員

研究者番号：60526317

(2)研究分担者

辻川 智代 (TSUJIKAWA, Tomoyo)

滋賀県立琵琶湖博物館・特別研究員

研究者番号：70443463